

# 聖路加国際病院研修報告

消化器・一般外科 利川 千絵

二〇一五年、息子を出産した直後に主人が東京に転勤することになり、人生で初めて東京進出しました。一年間ほど育児を楽しんだ後、そろそろ仕事に復帰したいと考えていた頃に、若井教授と永橋先生の計らいで、東京で行われる研究の打ち合わせに呼んでいただき、聖路加国際病院プレストセンター長の山内英子先生に引き合わせて頂きました。

聖路加国際病院（以下、聖路加）は、年間九〇〇件前後の乳癌の手術を行い、遺伝性乳癌や妊娠期乳癌、若年性乳癌、がんサバイバーシップなど多くの分野でパイオニア的存在といえる病院です。聖路加のチーム医療にとっても興味があり、特に患者さんへの様々なサポート体制（遺伝性乳癌卵巣癌、妊孕能温存、乳房再建、子どもをもつ親と子のサポートなど）はまだまだ新潟では遅れている分野であり、ぜひ見てみたいという気持ちがありました。また、山内先生の患者さんに対する真摯な姿勢、そして情熱、信念を目の当たりにし、山内先生のもとで勉強してみたいと強く感じました。早速、山内先生に連絡した所、千絵さん、ぜひ、聖路加へいらしてください。働き方をすぐにでも、相談したいので、早めに見学にいらしてください。とお返事を頂き、すぐに聖路加で働くことになりました。（メールで千絵さんと呼ばれたことに勝手に特別感を感じていたのですが、後に、山内先生はアメリカでの生活が長く、ファーストネームで呼ぶのが普通だったということが分かったのですが…）

山内先生は、プレストセンターのミッシヨンとして、ホスピタリティ、教育、研究の三本柱をかかげており、多くの人材を集め・育てて・送り出していました。プレストセンターには同世代、自分よりも若い乳癌外科医が沢山おり、診療と並行して各々に与えられたテーマに関する臨床研究を



矢印が山内英子先生

行っていました。驚いたことは、学会発表の予演会のクオリティでした。発表内容からスライドの細かいチェックまで幅広い指導があり、とても勉強になりました。皆、本番より予演会の方が難関であると話していたのが印象的でした。

聖路加と言えば、画像診断で知らない人はいない角田博子先生がいっぱいいます。画像診断のオーダーにはサブタイプまで含めた詳細な組織診結果を記載することがルーチンとされており、病理診断を加味した画像診断がなされていました。術前の画像診断と術後病理結果を照らし合わせ、徹底的に突き詰める、その姿勢に脱帽しました。徹底した術前診断と正確なマッピングと乳腺外科の技術で、取りすぎることなく、きれいな温存手術がなされていたことも印象的でした。手術と言えば、乳房全摘術の六〇七割が同時再建を行うという高い再建率に驚愕しましたが、多くの再建症例を経験することが出来たことは財産です。

プレストセンターの強みは何と言ってもチーム医療ではないかと思えます。プレストセンター開設当時、故日野原重明先生から、「慈しみの心にあちたプレストセンターを一同の協力で実現しよう」という言葉を胸にチーム医療の実践に努めてきたという歴史があります。多くのスタッフが、自分のなすべき役割をきっちりこなし、お互いにチェックし合うことで、多方面からのサポート体制が生まれ、乳癌の治療とともに患者さん一人一人の人生の悩みに寄り添った診療の実現に繋がっていました。

二〇一六年四月から二〇一九年三月までの約三年間、聖路加国際病院で研修させていただきました。あつという間の三年間でしたが、多くの学びと貴重な出会いがありました。聖路加で得た多くのことを、少しずつではありますが、新潟での診療に役立てていきたいと思っております。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さいました若井教授、永橋先生、母のような包容力でご指導くださいました山内英子先生、多くのご指導・ご支援くださった聖路加国際病院の皆様には感謝いたします。

(平成二十二年入会)

